

公爵家に生まれて初日に

跡継ぎ失格の烙印らくいんを押されましたが

今日も元気に生きてます！

登場人物紹介

ミント

跡継ぎ候補の一人。無表情で何を考えているかわからない。エトワには意外と従順。

クリュート

跡継ぎ候補の一人。キザな腹黒少年で、実はちょっとヘタレなところもあり。

リンクス

跡継ぎ候補の一人。態度はぶっきらぼうだけど、エトワのことをいつも気にかけている。

ソフィア

跡継ぎ候補の一人。優しい性格をした、とても可愛い女の子。エトワのことが大好き。

失格

エトワ

公爵家の令嬢。魔力がほぼゼロなので跡継ぎ失格の烙印を押されてしまった。転生前はごく普通の日本人で超マイペースな性格。「糸目」を意味するエトワと呼ばれている。

天輝

金の鳥を象った剣。エトワの能力の大半が封じられている。洗いな男性の声で鋭いツッコミを入れてくれる、エトワの頼もしい相棒。

ルイシェン&パイシェン

侯爵家の兄妹。貴族の子供たちが集まる「桜貴会」というサロンを仕切っている。落ちこぼれのエトワをよく思っていない。

スリゼル

跡継ぎ候補の一人。子供たちの中で一番大人っぽく、エトワにも親切に接しているが……？

目次

第一章	異世界というやつに転生しました。	7
第二章	跡継ぎ候補の子供たち	16
第三章	別荘旅行	45
第四章	学校入学	129
第五章	ポムチヨム小学校冒険者クラス	152
第六章	桜貴会 <small>おうきかい</small>	174
第七章	ガイダーになりました！	204
第八章	恐るべきモンスター、その名はモサモフ	235
第九章	ノムドの森の異変	252

第一章 異世界というやつに転生しました。

普通の日本人だった私が異世界に転生して最初に見たのは、周りののがっかりした表情だった。清潔そうな白い布に覆われた部屋。

そこには貴族風の格好の美青年さん、執事風の格好のお爺さん、それから白衣のお医者さんに、たくさん看護師さんと助産師らしきお婆さん。みんなが生まれたばかりの私を取り囲んでいる。その全員が一様に落ち込んだ表情をしていた。

なんだこれ。
あまりに暗い雰囲気、赤ちゃんが生まれたためでたい日だつてのにむしろ葬式だよ、と思わず心の中で突っ込んだ。あとから考えると、この日は彼らにとつて、おめでたい日がいきなり葬式に変わったようなものだったんだらうけど。

助産師のお婆さんが呻くように言う。

「まさか魔力をほとんどもたずに生まれてきたただけではなく、目すら見えない赤子とは……」

え？ 見えてるけど!? 超見えてますけど!!

私はしゃべれないので、再び心の中で突っ込む。

現にこうして周囲の状況を、きつちり認識できているぐらいだ。

そう思ったとき、私はようやく違和感に気づく。

あれ？　そもそも赤ちゃんがこんな周囲をはつきりと見ることでなんてできるっけ。目を開けるのすら、数日経たないときになかったような……

執事の服を着た白髪のお爺さんが、医者らしき男性にたずねる。

「間違いないのか？」

「はい……あらゆる魔法で検査しましたが、魔力は一般人の百分の一レベル。さらに目に先天性の異常があり、成長しても目が見えるようになることはないでしょう」

「まさか、魔法使いの名家として名高いシルフィール公爵家の第一子が魔力をほとんどもたずに生まれてくるとは……」

つまりはそういうことらしい。

私の生まれてきた家は魔法使いの名家で、それなのに私は魔力をほとんどもたずに生まれてきた。そりゃ、こんな雰囲気にもなりますよね、と同情する。

私を抱きかかえる助産師の後ろから、啜り泣く声が聞こえてきた。

「こんなはず、こんなはずないわ……」

「奥さま……」

そこには綺麗な女性が、ベッドに横たわっていた。

薄着の袖から覗く腕は真っ白で細く、迂闊に触れたら折れてしまいそうだ。容姿はどこか儂げで

美しく、だけど目には気の強さを感じさせる光があった。今は悲嘆にくれているけど。

どうやら、この女性が私の母みたいだ。

そんな女性のもとに貴族風的美青年が駆け寄り、その手を握って、情熱的な声音で話しかけた。

「ダリア、お前が気に病むことはない！　お前はよくがんばってくれた！　ただ……今回は……運が悪かったのだ……」

「あなた……」

たぶん、この男性が私の父なのだろう。この場で一番、偉いっぽいし。

生まれてきたことを不運認定されたけど……

でも、魔力の無い私を産んだことで女性が責められる空気にならなくて少し安心する。

「そうです。奥さまのせいではありません」

「そうです！　不運だっただけです！」

部屋にいる他の人たちも励ましの言葉をかけた。

（はいはい、不運の塊ですよ！）

赤ちゃんだから何もリアクションができないし、心の中だけで手を挙げておく。

しかし、このお葬式みたいな状況、どうしたらいいだろう。残念ながら、私に收拾をつけることは無理そうだった。

そんな中、執事風のお爺さんが、私の父らしき人に囁く。

「ご決断は早くされたほうがいいと思います……。当主として正しきご決断を……」

「ああ……」
なになに。

なんのお話ですか？

嫌な予感がして、二人の会話に意識がいく。

父は目を瞑って眉間に皺を作り、必死に何かを考えている。そんなに悩みすぎたら健康に悪いよ、と心配になるほどだった。

それから目を開き、苦渋の表情で私を指して告げた。

「この子は公爵家の娘にはふさわしくない存在だ。よって当主として廃嫡を宣言する」

それから執事に向かって言う。

「処分してくれ」

ほあく、なるほどなー。

って処分!?

ちよつと、処分つてなに!?

廃嫡あたりまでは当然かなあとと思って聞いていた私だけど、処分という物騒な言葉が出てきてぎよつとする。

あれですか？ もしかして文字通りの処分ですか？

憧れのファンタジーな世界に転生したのに、三十分も経たずに終わり？

ま、まじかあ……これ……まじかあ……

せつかくの異世界転生。

ちよつといいことも期待してたのに。私ツエーとか、モテモテで困っちゃうとか、平穩に生きていとか言いながら強敵に殴りかかるとか。

期待とのあまりの落差に呆然となる。

こんなのつてないよー。絶対おかしいよ。

人生の不条理を知りました。

二回目にしてようやく思い知りました。

当主の命令を受けた執事が侍女を呼び、指示を出し始めて、部屋はどたばたし出す。

そんな中、私の母親らしき女性は侍女たちに支えられて部屋を出ていった。

そして十分後。

「では……いきます……」

医者の手には先端が真っ赤に熱せられた鉄の棒がありました。その先端部分は丸く平らになっていて、何か模様が刻まれている。あつあつあつで、いい感じにお肉が焼けそうです。

(えええ……、わざわざそんな苦しそうなやり方してくれなくても……)

あんまりにもあんまりな方法に、私もさすがにへこんでくる。

もっと別な方法なかったの？ もうちよつと楽に逝けるような……ねっ……ねっ……？

そんなことを思っけていても、無情にもその鉄の棒は私の顔に近づいてくる。

ああ……まじか、これは……死ぬう……、死ぬのかあ……

どうも私の異世界生活は、ここで終わりらしい。

まだ……何もしてないのに……

知識チートで無双したり、料理作ってさすがと言われたり、いろいろやってみたかったなあ……
まあ勉強も料理も苦手だから、普通に無理なただけ……

そんなことを考えている私の額に、鉄の棒が容赦なく押しつけられた。

人生はノンストップ。

ぎゃあああああああああああ！

いったああああ！ あつつううういいいいいいいい！

じゅわー。くるくる。

じんせいおわた。

* * *

なーんてことがあったけど、今も元気に生きてます！

もう三歳ぐらいになります。ようやく歩けるようになってきました。

私の額には、あれ以来、変な文字と模様が刻まれています。異世界の文字で『失格』と書かれています。ちなみに魔法によって刻まれるから、一生消えないらしいです。

この烙印がある限り、シルフィール公爵家の跡継ぎには絶対になれないんだとか。才能のない子

が血筋に頼って後継者争いを起こさないために、こうやって処分すると聞いた。

とはいつても、よっぼどのがない限り、こんなことしないらしい。私はそのよっぼどな例に当てはまってしまったというわけ。

これが『処分』なのだそうだ。

もう、なんだ。びっくりさせないでよ。

てつきり殺されるのかと思ったよ。

正直、赤ちゃんに焼き印もかなりエキセントリックだけど、文字通り処分されるよりはマシだね。ということで、私の中では異世界の文化ってすごいねって感想と、生きてて良かったって気持ちで落ち着いている。

大切だよ、命。

さらに跡継ぎ失格ということで冷遇されてるかといえそうではない。

いや、たぶん跡継ぎとして育てられる場合よりは、待遇は悪いんだろうけど、そこは大金持ちの公爵家ということで、三食きちんと美味しいごはんを食べさせてもらい、使用人に面倒を見てもらい、何不自由ない生活を送っている。

どうやら、十五歳になるまではこのまま面倒を見てもらえるらしい。十五歳を過ぎたら家を出ないといけないけど、それまではこの国の学校にも通わせてもらえるそう。

だから十五歳までには自力で生活する術を身につけなければならないけど、しばらくは悠々自適な生活が送れるのだ。

ということでの私の異世界生活は、今のところぜんぜん問題ナッシングである。

家族関係のほうはどうかというのと、当然かもしれないけどかなり希薄だ。

お父さま——名前はクロスウェルさまというんだけど——は一ヶ月に一度部屋に会いに来るぐらい。

大貴族の当主と跡継ぎ失格の子供だと、こんなもんよねという感じである。むしろ定期的に会いに来ることに、微かな愛情を感じてしまっている。

お母さまのほうは心労がたたり、体調を崩して、遠方で静養中だ。

私たちが暮らす国ウィルゼルドには、最強の魔法使いたちと呼ばれる四大公爵家が存在する。その中でも『王家の盾』と別名で呼ばれるシルフィール公爵家に嫁いできて数年、やっと生まれた待望の子供が魔力ほぼゼロの私である。

申し訳なくなってきましたね……。すみません……

ということ、弱ってるお母さまに、魔力ゼロの子供は劇物すぎるので、あれ以来まったく会ってません。それでいいと思います。早く元気になってください。

ちなみに個人的な話になってしまいうけど、どうも成長が遅い気がする。

子供って二歳になれば立つて歩けることが多いらしいけれど、私の場合、三歳になってやっとできるようになった。

しかもまだ、うまく歩けない。足がぐくぐくする。

他の子に比べると、成長がかなり遅いんじゃないだろうか……

あ、そういえば目が見えないって言われてたけど、本当に見えませんでした。

そもそもこの歳になっても、目が開かないという……

じゃあ、あのときも今もどうやって周囲を見回していたかというのと、心眼〈マンティア〉というスキルらしい。

微少な魔力を周囲に放って、その力で景色を認識する能力なんだとか。かなりレアなスキルらしく、魔法の検査でも気づかれなかったけど、レアだからといって別にすごい能力ってわけでもない。だから周囲の評価も相変わらずだ。

ちなみに私の一般人の百分の程度の魔力は全部それに使われてるらしい。

目が開かないせいで、周囲からは糸目エトツと呼ばれるようになり、それがいつの間にか名前にもなっていました。この世界では生まれてすぐに名前をつけたりはしないようだ。

近況報告としてはこれぐらいだろうか。

そういえば転生したときに、神さまに会って何か力をもらった気がするんだよね。

でも、なぜだろう。それについてぜんぜん思い出せない。

思い出そうとすると、頭がズキズキする。

これは何かこの世界に関わる重大な秘密が隠されてるのでは？

……無いな。

まあ、話が逸れたけど、力は無くとも、それなりに異世界で楽しく暮らしてますってことで！

第二章 跡継ぎ候補の子供たち

あれからまた一年経って、四歳になりました。

あつ、私にも個室が与えられて、そこで暮らしています。

広さは1DKぐらい！ 超ひろい！

その部屋で運ばれてきた美味しいごはんを食べて、床でごろごろしていたら、侍女さんが部屋にやってきた。

「エトワさま、クロスウエルさまがお呼びです」

その言葉に珍しいなと思う。

私がお父さまに呼び出されることはめつたにない。月イチで会うときに、一緒に食事を取らされるだけだ。

なので呼び出される理由に、まったく想像がつかない。

侍女さんに手を引かれ、お父さまがいる部屋まで廊下をぬるつと歩く。

シルフィール公爵家の本邸は、お城みたいな大ききさで、こうして父親に会いに行くにもかなりの距離を歩かなければならない。

まあ、これが嫡子ちやくしだったら、近場の部屋が与えられたのだろうけど。

「ここでございます」

侍女さんに案内されたのは、私の部屋の扉よりかなり大きな扉の前。

扉を開けてもらって中に入ると、そこには見たことのない五人の子供たちがいた。

私と同じ年ごろの男の子四人に、女の子一人。

それぞれ容姿や雰囲気は違うけれど、地球生まれだったら全員キッズモデルをやっつてそうなほど美形である。

見るからに利発で、おまけに育ちの良さそうな雰囲気がある。

子供たち五人はソファに座り、その反対側に父が、そして後ろには執事が控えている。

私がぼけーつと突っ立っていると。

「来たか、糸目イトメ。そこに座っていないさい」

父に言われ、ちよつと離れたところに置いてあった椅子に座る。

五人の子供たちは行儀よく、びしつとした姿勢でソファに座っていた。なんかもう私とは育ちが違う感じた。

この子たちいったい誰だろう。

当然、私の頭にはそんな疑問が浮かぶ。

「シルウェストレ五侯ごこうの子息である君たちに今日集まってもらったのは、以前話した通りの事情だ」

シルウェストレ五侯ごこうと聞いて、私はああつと思ひ出す。

このシルフィール公爵家は国内最高位の貴族だけあって、たくさんの分家をもつ。その中でも家格が高く有力で、本家とかなり近い扱いなのが、シルウェストレ五侯と呼ばれる五つの侯爵家である。

代々、本家の当主とその跡継ぎを守る護衛役という役目を引き継ぎ、最悪の事態には養子としてシルフィール家の跡継ぎになったりすることもあるらしい。定期的に婚姻が交わされていて、血縁も非常に近くなっている。

「この家には後継者がいない。ダリアはもう子供を産む自信がないそうだ……。そこで君たちには、この家の跡継ぎ候補になってほしいと思っている」

あ、最悪の事態って私ですよ。

どうやら私が生まれたことが、お母さまのメンタルをぶち折ってしまったらしい。国でも最強と言われる魔法使いの一人であるお父さまとの間に、魔力ほぼゼロの子供が生まれてきたのである。自分に問題がないと思わないわけがない。さもありなん。

『由緒正しい公爵家に跡継ぎがない問題』発生である。

そこでお父さまはシルウェストレの子供たちを呼んで、跡継ぎ候補にすることにしたらしい。

ああ、申し訳ない……

「君たちの能力を調べさせてもらった。素晴らしい魔力と魔法の才能だ。誰もが公爵家の当主としてふさわしい素養をもっている。できることなら君たちうちの誰かに、このシルフィール家の跡継ぎになってほしい」

「我が家にとって大変名誉な話。感謝の言葉しかありません」

「シルフィール公爵家の跡継ぎという大任。僕のような者がふさわしいかはわかりませんが、精一杯の努力をさせていただきます」

「身に余る光栄です。私も精一杯の努力をすることを約束させていただきます」

なにこれ、この子たち本当に四歳ですか？

私と同じ年なのに、大人顔負けのはきはきとした口調と、優雅でびしっとした所作で、お父さまの言葉に答えていく。

気のせいだろうか、彼らの周囲にきらきらと輝くオーラみたいなのが見える。

なんかもう自分とは別の生物な気がしてきた。

魔法の才能が抜群な上に、利発で聡明。おまけに容姿も端麗。

確かにこの子たちなら、公爵家の跡継ぎ候補にもふさわしいだろう。

「ただ誰を跡継ぎにすべきかという話なのが、現状、君たちの力は非常に拮抗している。ここで安易に誰かを選べば、それ以外の家への誠意を欠くことになってしまう」

シルフィール公爵家とシルウェストレ五侯との関係はとても深いらしい。

誰か適当に選ぶなどということはできないのだろう。家同士の関係まで考えると。

「そこで君たちには今日からこの家で暮らしてもらい、十五歳になるまでの間に試験を受けてもらう。その中で、もつともよく成長し、忠実に役目を果たさせた者を、この公爵家の跡継ぎとして選ばせてもらいたい」

「試験とはなんでしょうか？」

子供たちがお父さまにたずねる。

「君たちは本来シルフィール家の次期当主を守る護衛役という役目につくはずだった。次期当主を守るための魔法の力、人とのコミュニケーション能力、そして貴族の一員として大切な他家を尊ぶ心、これらすべてが必要な仕事だ。だからその役目をどれだけ立派に務められるかを君たちへの試験としたい。君たちにはシルウエストレ五侯の子息として護衛役を務めてもらいたいんだ」

その言葉に子供たちは戸惑った顔をする。

「し、しかし、守るべき跡継ぎの方がおられません」

そう思うのも当たり前だ。

肝心の跡継ぎがないから、彼らがその候補にひっぱり出されてるのだ。なのに、跡継ぎの護衛役をやれっていうのは無理な話だ。

そんな話を蚊帳の外から聞いていた私に、お父さまの目がようやく向く。

え、私つすか……？ 他ならぬお父さまから跡継ぎ失格の判定を下された身つすよ。

「次期当主の代わりは、このエトワを使う」

まじつすか……

跡継ぎ失格の人間を守るってかなり意味ない気がする。ていうか、守る意味あるの？ 襲ってくる敵とかいなくない？

私の疑問は当然のことだったらしい。

子供たちも困った顔をした。

「しかし、エトワさまは……」

言葉を濁す少年。

うん、気持ちはわかる……。言いたいこともわかる。

それにお父さまが頷く。

「その通りだ。残念ながら、守る価値はない」

いや、そこまではつきり断言されると哀しいです。

そう思っていたら執事が近づいてきて、私の首に何かをかけた。

緑色の宝石がついたネックレスだ。澄んだ南国の海のような色をしていて、不思議な文様が刻まれている。

なんじゃこりゃ。

「これは我がシルフィール家の家宝の一つ。風の大精霊石だ」

うん、やばいよ。明らかにお高いというか、貴重すぎて値段さえつけられない雰囲気がある代物が出てきたよ。

これ失くしたら、家どころか国レベルでやばくなるやつだよ、たぶん。

やばい、やばい。そんなもの、私の首にかけんでくれ。

しかし、私の意思は微塵もその場に反映されないらしい。淡々と話は進んでいく。

「君たちには十五歳になるまで、この石がかけられたこの子を守ってほしい」

なるほど、価値がない分は、家宝で埋め合わせることね。って、なんて無茶をするんだ……このおっさん……。私の父親だけ……

「わかりました！ 何があるうとシルフィール家の家宝、大精霊石を守り抜いてみせます！」

「シルフィール家の宝、絶対悪党には渡しません！」

「アリエル家の人間として、クロスウエルさまの期待に必ず応えてみせます」

うん、私おまけだよ。完全におまけ……

大精霊石がメイン……

拒否権はないっばい。

ちくしょー、わかったよ。大人しくぶらさげておくよー。

この騒動の原因は私にもあるから、大人しくこの状況を受け入れることにする。

そもそも抵抗したところで、どうにかなったとは思えないけど。

最後に、今まで私と目も合わさなかったお父さまが、ちらつと一度だけ私の目を見た。表面上はいつも通り何もない感じの表情だったけど……なんとなく伝わってきてしまう。

なんだよー、そんな顔すんなよお……

大貴族の当主ともなると大変だなあ……

どうやらこの件はお父さまとしても本意ではないようだ。

貴族の当主っていったら絶大な権力をもっていてやりたい放題と思われがちだけど、前当主や親戚たちの意向を汲まなきゃいけなかったり、いろいろ大変らしい。

今回の件も、そういうところからの圧力があつたのだろう。

私は心の中でため息をついて、この状況を完全に受け入れる。

そして話はまとまり、お父さまと執事は去って、部屋には子供だけが残された。

なんだか気まずい沈黙が私たちを包み込む。

そんな中で男の子の一人が、いきなりソファーに体を投げ出し、めんどくさそうな声で言った。

「あーだりい。なんでこんな弱そうなわけわかんないヤツの護衛をしなきゃなんないんだよ」

あれ？ この子、お父さまといたときとぜんぜん態度が違います……？

* * *

お父さまがいなくなった途端、赤い髪の男の子が、ソファーに寝っ転がって不貞腐れた態度で愚痴を言い始めた。

あれ？ 育ちのよきそうな笑顔で、お父さまの言葉にはきはきと答えていたあの子はどこいったの？

私が固まっていると、跡継ぎ候補の中で唯一の女の子が言った。

「こらっ、リンクス！ エトワさまに失礼でしょう。謝りなさい！」

あ、女の子のほうは普通でよかった。

女の子はお父さまがいなくなる前と後でまったく態度が変わらなかった。唯一の女の子が、友達

になれそうな感じの子で安心する。

その女の子は銀色の髪かみの可憐かわいな子で、将来美人になることを確信させた。そもそもこの子が公爵家の娘として生まれていれば、こんな状況は起こらなかったのかもしれない。

「本来の俺たち護衛役の仕事は、次代のシルフィール家当主となるお方を守ることで。もちろん、才能だつて魔力だつて俺たち以上に優すぐれたお方だつたはずだ。なのに、このガキは魔力がないどころか、目も見えない、しゃべりもしない。こんなの守りじゃなくてお守りもだぜ。やる気が出ないのは当たり前だろ」

いや、しゃべるけどね。普通にしゃべるけどね。

今は、あつけにとられてしゃべれないだけで。

まあ、あとはおおむね事実だけ。

「リンクスー！」

女の子が顔を真っ赤にして怒り出す。

それを黒髪のさわやかそうな少年がなだめた。

「落ち着けよ、ソフィア。怒りすぎだ。それからリンクス、お前もちよつとおかしいぞ」

おお、この男の子もまともなのかな？

——と思った私が間違いました。

「この子供の子守こもりをすれば、シルフィール家の跡取りの座が転がり込んでくる。こんなにお得なことはないだろ？ まあやめたいならさつさと降りてくれよ。ライバルが減つて得するのは僕だけ

らね！」

「クリュート！ あなたも失礼よ！」

女の子に怒られても、黒髪の美少年は、腹黒そうな笑みを浮かべたままだつた。

いや、本音ぶつちやけすぎですよ、君。

あと、さつきから君たち私のことガキとか、子供とか言ってるけど、君たちも子供ですからね！

そりゃ、ちよつとぐらいあなたたちのほうが美形で、頭良さそうで、立ち居振る舞いが優雅で、すごそうなオーラ出てるけどさ。

けどさあ……

そんなことを思っていると、私の顔がつつんと突つかれた。

こんどはなんじゃい。

と思つて振り返ると。

金髪の男の子が感情の見えない瞳で、私をじーっと見つめながら言った。

「お前、目が開かないのか？ 何かの病気なのか」

え、こんな無表情な子だつたっけ。

確か、お父さまと話したときは、上品に微笑んでいたような。この五人の中では、一番背が低いので、お人形さんみたいだと思つたんだもの。

でも、口調は失礼だつたけど、その言葉が嫌味じゃないのはなぜかわかった。

たぶん、こういう子なんだろう……。天然系つてやつで。



なにせよ、みんなお父さまの前とは違いすぎる。

男の子たちの豹変^{ひょうへん}ぶりに呆然^{ぼうぜん}としていると、最後の男の子が他の少年たちの前に立ちふさがった。「みなさん、エトワさまは仮^{かり}とはいえ十五歳まで私たちの主^{あまじ}となられるお方です。失礼な態度は取らないように、敬意を払って接しなさい」

跡継ぎ候補の子たちの中で、一番背が高く、大人っぽい子だ。

その男の子は、私の手を取り言った。

「エトワさま、他の護衛役たちの無礼をお許しください。私がエトワさまを、十五歳まで無事に守り通してみせます」

その笑顔はなんだか作られたもののような気がして、子供たちも大変なんだなあと思って思った。

父から私の護衛役を命じられた少年少女たちは、三人は私を尊敬するつもりゼロ、二人は内心は不明だが表面上は敬意を払ってくれる。そんな状況みたいだ。

私としては、何か問題が起きなければ、これでいいと思うけど。

護衛役同士でもあまり仲良くなさそうだけど、せめてこの首にかけられた大精霊石だけは守ってくれたまえ、そう思う。

「えーと、まあいろいろ複雑でしょうけど、これからよろしくお願いします」

私がそう言って五人に頭を下げると、なぜかリンクスくんとクリュートくんが飛び上がった。

「じゃ、じゃべったあ!」

え、じゃべってたよね私。お父さまと一緒にいるときとかに、確かじゃべってたよね。

——あとで思い返してみるとまったくしゃべってなかった。
そりゃ驚かれるわけだよ……

* * *

次の日から、跡継ぎ候補の子たちの荷物が公爵家に運び込まれ、一緒に生活が始まった。本来、護衛役という仕事は、彼らが六歳になったときから始まるらしい。それが二年早まったのは、彼らが跡継ぎ候補になったからかもしれない。

その跡継ぎ候補になった子供たちは五人。
まず、スカーレット侯爵家のリンクスくん。

子供たちの中でもリーダーシップを取りたがり、ちょうど生意気盛りといった感じの男の子だ。しかし、大人相手にはいい子そうに振る舞う処世術しよせいじゆつもこの歳にしている。気の強さを表すような赤い髪が特徴で、以前も話した通りかなりの美形である。

次が、レオナルド侯爵家のクリュートくん。

一見さわやかだけど、発言が腹黒く、リンクスくん以上の問題児かもしれない子だ。でもやっぱり外面そとづらはいいぞ！ 綺麗でさらさらの黒髪をしていて、一度は触さわってみたい。もちろん、例に漏れず美形だ！

三人目は、オルトール侯爵家のミントくん。

正直、私もよくわからない不思議ちゃんな感じの子だ。無表情でポツポツとしゃべるから、いまいち何を考えているのか不明。でも、色素の薄い金色の髪はまるでフランス人形みたくで最高だ！
って思わず趣味が出てしまったよ……

あとあと、アリエル侯爵家のスリゼルくん。

四歳なのに背が高く、二つくらい年上に見える。礼儀正しい少年で、私にも優しくしてくれるよ！ 白に近いプラチナブロンドの綺麗な髪をしている。そしてやっぱり美形だね！

最後は、フィン侯爵家のソフィアちゃん。

この子が良い子なんだよねー。ほぼ風の大精霊石の台座と化してる私のことを、ちゃんと主人扱いしてくれるし、いろいろと気を遣ってくれる。おまけにかわいい。銀色の髪はさらさらで、まるでお姫さまのよう。ああ、この子がいてくれてよかった！ 本当にそう思います！

この五人が、落ちこぼれの私に代わって公爵家の跡を継いでくれる、後継者候補の子たちである。そんな五人の子供たちとの生活は、今のところ平穏だ。

護衛役ということでは彼らとは日中を一緒に過ごすことになるのだけど、私としてはかわいい家族が増えた感じだ。

今日も一緒にテーブルに座り、食事を取っていると、リンクスくんが言った。

「食べ終わったら、ペルシエールやろうぜ！」

ペルシエールとは、異世界版の鬼ごっこだ。

どんな世界でも、子供たちがやる基本的な遊びは変わらない。

「ああ、かまわないよ」

「うん……」

「よし！ 決まりだな！」

四歳にあるまじき賢さをもつこの子たちだけど、こういう遊びで盛り上がっちゃうところを見ると、まだまだ子供だなあってほっこりする。

「ちよっと待ってよ！ エトワさまがいつて言っていないわ」

「その通りだ。エトワさまの許可がなければだめだ」

律儀に抗議してくれるのは、ソフィアちゃんとスリゼルくんの二人だ。

この世界で過ごして気づくことは、貴族の身分があり、血統が重視されると同時に、かなり実力も大事な社会だということ。

貴族たちは誰もが優秀な魔法使いだ。そして有名な貴族は、ほぼ例外なく魔力が大きい。権力をもつ貴族が、それに値する魔法の力ももっている。それがこの世界なのだ。

その影響もあつて子供同士の付き合いにおいても、魔力のない私の立場は微妙なのである。

なのにこの二人は、何かと私の意見を尊重してくれようとするのだから、本当に良い子たちだと思ふ。

ただし私としてはリンクスくんの意見に反対する気はナッシング。

「私がかまわないよ」

子供はたつぷり遊ばないといけないよね！ いいことだと思います！

「でも、でも、エトワさまが……」

「なんだよ、ソフィア。もしかして負けるのが怖いのか？」

リンクスくんがこれまた子供っぽい挑発をする。

「むっ……そんなじゃないわよ！ ただエトワさまが……」

ちらつとこちらを見て言うソフィアちゃん。でもその目には闘志が燃え上がっています。

うんうん、本当はやりたいんだよね。好きだもんね、ペルシエル。わかっています。

「大丈夫！ 大丈夫！ やろう、ペルシエル！」

私は親指をぐつと立てて子供たちの要望を承認する。

「ほら、糸目もいって言ってるし、やろうぜ！」

「さまをつけなさい！」

「へいへい」

実はペルシエルをやることを、ソフィアちゃんがあんなに渋っていたのには理由がある。

ペルシエルはペルシ（猫）とエル（天使）に分かれてやるゲームだ。

ペルシが鬼ごっこでいう鬼で、エルが逃げるほう。

姿を隠す魔法を使って猫の尻尾にいたずらしようとした天使が、猫に気づかれ追いかけて回されたという神話から名前がつけられてるらしい。

そして普通の鬼ごっここの一番の違いは――

――魔法を使ってもOKってこと。

「げふっ！ げふっ!! ぐはああっ!!」

遊びが始まって三十秒、陸に打ち上げられたシャケのようにピクピクと地面に横たわる私が出た。この異世界版鬼ごっこ、元いた世界とはスピードが違う。

みんなが魔法を使ってバイクみたいな速度でびゅんびゅん飛び回るから、私のような一般ピーポーは立ってるだけで危ない。

子供たちの魔法を使った追いかけっこに、ろくな反応もできずに轢かれまくった私は、早いと開始数秒で地面に横たわることになる。

「なんだよ、おまえー。使えねえー!」

リンクスくんが子供らしい不満顔で叫んだ。

ごめんよ。この遊び、地球生まれの私にはハードすぎるよ……

エル（天使）が四人、ペルシ（猫）は二人。エル（天使）側のリンクスくんから不満があがることは仕方なし。

「エトワさま、大丈夫ですか？」

ソフィアちゃんに心配そうな顔で覗き込まれ、私は最後の力を振り絞り、プルプルと足を震わせながら立ち上がり、親指をぐっと立てる。

「だ、だいじょうぶ。でも、ちよつと疲れたから、見学してもいいかな？」

「は、はい……」

こうして、私はなんとかエクストリーム鬼ごっこから逃れることができた。

木陰の岩に座り込み、再開されたペルシエールの様子を眺める。

シルウエストレの子供たちは本当にすごい。いとも簡単に魔法を操り、鳥のように空を飛び、時には遠距離から魔法の攻防をしてみせる。

たぶん、子供たちみんながこうなんじゃなくて、彼らはこの世界でも特にすごい子たちなんじゃないかと思う。

なんで私がこんな無謀な競技に一時でも参加したかというのと、別に私がアホだからというわけではない。いや、アホかもしれないけど……

私が参加しないとソフィアちゃんとスリゼルくんの二人が、「エトワさまが参加できる遊びじゃないやらない」と言ってるから……

最初だけでも私が参加しなければ、ソフィアちゃんもスリゼルくんもこの遊びができない。

そういうわけでペルシエールをやりたがるリンクスくんたちと、本当はやりたけれど私のために反対しなければいけないソフィアちゃんたち——二者の間を取り持つため、最初は私も必ず参加しなければいけなくなっている。

立ち位置としては中間管理職みたいなものだ。

全国のお父さん、こんなに大変だったんだねえ……

今、五人は自由に空を飛び回ってペルシエールを楽しんでいる。元いた世界とはちよつと違うけど、ほんわかしたほほえましい景色だ。

お腹に三発ほどフライング頭突きくらった甲斐があったよ。ふっ……

私は侍女さんたちに淹^いれてもらったお茶を飲みながら、空を飛び回る五人の子供たちをまつたりと眺めた。

* * *

シルウエストレの子たちがうちに来て、ちょうど一週間ほど。まあまあうまくやれてる気がします。

リンクスくんたちとソフィアちゃんたちが、よく私の扱いを巡って対立するけどね。

それはそれということ。

私としては利発で元気なあの子たちを見るのは楽しいものがあります。まあちょっと、彼らの遊びについていくのは厳しいときがあるけど。

今日も、リンクスくんやソフィアちゃんたちと行動して一日を終えて、疲れて寝てただけど、夜も深まったころ、トイレに行きたくなって起きてしまった。

いくつになっても、こういうシチュエーションはちよつと怖いよねえ。

とはいえこの歳になって、誰か一緒についてきて、などと言つのもはばかられたので、一人でえつちらおつちらとトイレに向かったんだけど。

みんなが寝静まった館^{やかた}で、誰かの話し声が聞こえてきた。

心霊現象ではないよ。

部屋の中から聞こえてきたからね。

それはシルウエストレの子たちに与えられた部屋の一つだった。

誰の部屋かは、まだ覚えきれてないし、暗いからわからなかったんだけど。たぶん遠話^{えんわ}といわれる、魔法を使った電話みたいなので会話してたのだと思う。

「ええ、母さま、僕が必ず公爵家当主の地位を手に入れてみせます。母さまの息子^{まこ}という誇^{ほこ}りにかけて」

不思議なことに、私には会話の相手に気丈に答えるその声が、泣いているように聞こえた。

「他のどの候補にも負けません。僕が一番になって、公爵になって、母さまの血の正しさを証明します」

考えてみると、四歳から親もとを離れ、公爵になるために競争させられてるんだよね。大変じゃないわけがないと思う。

それでも手に入れないほど、公爵家当主の地位は大きいものだと言える。

私としては、シルウエストレの子たちから誰かを眞^{まこと}にするわけにはいかないけれど、でもみんながんばって、一番に望む誰かが継いでくれたらなって思う。みんなを応援したい。

それは自己欺瞞^{じこぎまん}かもしれないけど。

これ以上、盗み聞きするのも悪いので、私はその場を離れた。

日がな一日部屋でごろごろして、お茶を飲んでると思われる私ですが、ちゃんと勉強もしてたりもします。

主に勉強しているのはこの世界のことや文字の読み書き。

侍女の人に教えてもらいながら、文字の練習をしたとき、リンクスくんたちに「まだそんなやつてるのか」という目で見られたけど、ふっ……気にしない。

凡人には凡人のペースがあるのだよ。天才児の君たちと比べないでくれたまえ。

それにしても心眼〈マンティア〉は便利なスキルです。

本当の目のように色も認識できるし、文字を書くこともできます。それだけじゃなく、この力を使えばなんと自分の姿を見ることが可能。

鏡いらずで便利。

ただ謎なのは、転生したとき神さまにこんなスキル注文した記憶がないこと。あと、目が見えないことについても聞いてなかったような。

まあ、最終的に不便がないからいいけどね。いえーい。

私だけでなく、リンクスくんたちも勉強しているようです。

彼らには家庭教師がついてみっちり。

そして今日はなんと魔法院まほういんという施設を見学しに来ました。

魔法院とはその名の通り、魔法についてのことがらを扱う施設だそう。

こちらへん、この世界は複雑だ。

貴族たちはほぼ全員魔法使いではあるけれど、魔法使いが全員貴族というわけではない。

平民の中にも、魔力に優れた人間はいるらしい。

彼らは魔法の研究をしたり、貴族の部下として働いたり、冒険者になったりする。

ちょっと話は逸れるけど、この世界、冒険者がいるんだね！

これを聞いたときは、ちょっとときめいた。

十五歳になったら独立しなきゃいけないし、私も冒険者を目指そうかなあって思ってる。

話を戻そう。

魔法院は主に、平民の中で魔法の研究をする人たちが集まる施設らしい。

それだけでなく、魔法の訓練や、魔力検査、その他いろいろなことができる施設だ。

今日の目的の一つは魔力検査。

前に公爵家でもしたんだけど、詳細な検査はここで行わなければならないらしい。貴族の子たちは

必ず受けるんだそう。

定期健診みたいなものだねえ。

魔力ほぼゼロの私はリンクスくんたちのおまけです！

「それでは、検査をさせていただきます」

白衣を着た研究員らしき人が、リンクスくんたちに言う。

「リンクス・スカーレットさま」

最初はリンクスくんが呼ばれた。

ちなみに跡継ぎ候補の子たちは、元の世界の病院で着る検査着みたいな服を着ていた。リンクスくんが入っていったガラス張りの部屋には、大きな魔法陣が描かれている。公爵家にある魔力を調べるための魔法陣をさらに大きくして複雑化したようなものだ。その中央にリンクスくんが立った。

「今から魔法陣を起動します。精神を落ち着かせてください」

リンクスくんは慣れたもので、落ち着いた顔で魔法陣の中心に立っている。

研究員の人が呪文を詠唱すると、魔法陣が起動した。

魔法陣から赤や青の円形の光が出てきて、リンクスくんの体を通していく。

その光は糸のようになり、別の研究員が持っている紙に何か書き込まれていった。

おお、魔法っばい！

「す、すごいぞ……」

「さすがスカーレット家のご息さま……」

研究員の人たちの言葉に、私も紙の内容が気になり出す。

光がおさまるのを待って、心眼〈マントリア〉を使って紙を覗き込む。

びよびよんとジャンプしてるのは気分の問題だよ、君。

名前…リンクス・スカーレット

年齢…4歳

性別…男

生命力…750

持久力…550

マナ…1500

筋力…80

耐久力…50

敏捷…102

魔力…620

スキル…風魔法Lv4 炎魔法Lv3 詠唱短縮Lv2 攻撃魔法強化Lv1

加護…風の大精霊の加護 炎の精霊の加護

おお、ステータス表示だ。

やっぱり異世界にはこういうのがあるんだねえ、と思いながら内容を見ていくけれど、何もわからない。

でも、研究員の人の反応ですごいことはわかる。

「この歳で詠唱短縮を身につけているとは……」
「シルフィール家の血筋の証である風の大精霊の加護だけではなく、炎の精霊の加護まで受けているぞ……」

「素晴らしい！」

次は、ソフィアちゃんだった。

ソフィアちゃんが、ちよつと緊張した様子で部屋に入っていくと、同じような手順で魔法陣が起動される。

例によって、結果の紙を覗き込んでみると。

名前…ソフィア・フィン

年齢…4歳

性別…女

生命力…450

持久力…350

マナ…2250

筋力…50

耐久力…30

敏捷…60

魔力…920

スキル…風魔法Lv5 光魔法Lv1 詠唱短縮Lv1 妖精召喚(聖属性)

加護…風の大精霊の加護 天使の加護

二人を比較して、ようやく違いがわかってきた。

女の子だからか、生命力や筋力なんかはリンクスくんより少なめ。

代わりに魔力はソフィアちゃんのほうが高いみたいだった。

そして光魔法に、天使の加護。どちらもかなりレアなものらしい。

うくん、あらためてすごい子たちだなと思う。

それから、クリュートくん、ミントくん、スリゼルくんの検査も終わる。

クリュートくんは水、土属性の魔法と精神操作の魔法が扱えるという結果だった。ちよつと怖いよ。

ミントくんは回復魔法と魔獣召喚のスキルが使えるみたい。うんうん、動物好きだったもんね。うちに来てからは門番の犬を撫でてる光景をよく目撃してました。

スリゼルくんは光魔法と同じくらいレアな闇魔法が使えるらしい。うーん、カッコいい。

全部の検査が終わったと思ったら、研究員の方が私のほうに歩いてきた。

「あなたも検査するんですね。検査着は渡されませんでしたか？」

そう話した途端、別の研究員の方が慌てた様子でやってきて「おいつ」とその背中をひじて突い

た。突かれた研究員の人が、振り返った私の額を見て「あっ……」と声を漏らす。

この検査は貴族の子に義務つけられているものだけど、あれなのだ。ここでいう貴族の子というのは、貴族の後継者資格をもった子たち——第一継承権とかではなく第二第三でも継承権さえあればいい——なのだ。

要は貴族の家を継ぐのに十分な魔力をもった子たちだけが対象というわけである。

なので私はこの検査制度の対象からは外れる。

まあ、跡を継ぐ可能性がない子をいちいち検査しても仕方ないしね。

研究員の人たちの間にちよっと気まづい沈黙が流れる。

私は彼らを見上げて聞いてみた。

「もしよかったら、検査を受けさせてもらっても大丈夫ですか？」

「え……？ い、いいんですか……？」

「ご迷惑でなければよろしくお願いします！」

私は親指を立てて、お願いをする。

実は興味はあったのだよ。

私自身のステータス。どんなもんだろうって。

許可をもらったので、堂々と検査室の中に入っていく。

「そ、それでは、検査を開始させていただきます！」

その言葉とともに、魔法陣が光り始めた。

本当の目じゃないからチカチカしない。心眼〈マンティア〉って便利だなあ。

検査が終わると、私は研究員の人のほうに走っていった。

「見せてください！」

ぴよんぴよんと、検査用紙を要求する。

「は、はい」

研究員の人から検査用紙を渡された。

私はそれを覗き込む。魔力についてはぜんぜん期待してないけど、その他の項目はあれだよ、学校の体力測定みたいな感じに楽しめるはず。

どんなもんなあ、どきどき。

名前…エトワ・シルフィール

年齢…4歳

性別…女

生命力…11

持久力…7

マナ…1

筋力…4

耐久力…2 (+30)

敏捷…10

魔力…0.1

スキル…心眼〈マンティア〉

加護…なし

なにこれ、スライムよりひでえ……

ていうか小数点以下表示できたのかよ……

第三章 別荘旅行

ついに五歳になりました。

あと一年で学校に入学。早いものです。

そういえば、あの魔力測定のとときの耐久力についてた（+30）って数値だけど、あのあと研究員の人に聞いてみたところ、風の大精霊石の効果みたいです。

ただのめちやくちや貴重な飾りだと思ってたら、そんな効果があったのかあ、としみじみ感じました。

そんなトリビアは置いておいて、明日から別荘に行くことになってます。

貴族の子供たちは、元の世界でいう春休みの時期、別荘で過ごすことが一般的なのだそうです。

知らなかったよ。お父さま、忙しいしね。うん。

とにかくリンクスさんとクリュートくんが行きたいと言ったので、私たちも行くことになりました。

お父さまの代わりに執事長のクラットレさんが引率いそぐしてくれることになってます。私が生まれたときに近くにいた、あのお爺じいさん執事です。

正直、公爵家から出たことがなかったから、かなり楽しみです。

ビバ！ 異世界での初旅行！

リュックを準備して、着替えを入れてーの、石けんやタオルなどのお風呂道具を入れてーの、それから薬も一式あったほうがいいよね。

わくわくしながら準備をしていたら、リンクスくんやソフィアちゃんたちから、不審な目で見られました。

君たちー、なんですか？

私が首をかき上げて視線を返すと、ソフィアちゃんが代表するようにおずおずとたずねてきた。

「エトワさま、何をしていたらっしやるんですか？」

「旅行の準備ですけど？」

「え？」

「え？」

お互い何かおかしいですか、みたいなやり取り。

私には原因がさっぱり。

なんでこんな変な子を見るような目で見られなければならないのか。

そんなことを思っていると、スリゼルくんが私に言った。

「エトワさま、旅行の準備でしたら侍女たちがやっていますか？」

えっ……

その言葉に、はっと衝撃を受けた。

私は今まで旅行には着替えや洗面用具、お金が必須だと思っていた。

で、でももしかして、貴族の旅行にはそんなもの御必要ではない？

いや、必要かもしれないけれど、少なくとも自分で持ち歩く必要はない！

侍女の人たちが必要な荷物を持ち運んでくれて、私たちは手ぶらで移動。

そ、それって――

今までの旅行という概念が、根底から覆くつがえってしてしまう！

「こ、これが！ ぶるじよわーる……!!」

私は衝撃のまま叫んで、子供たちからさらに白い目で見られた。

いや、でも、私ってばかなり恵まれてるよねえ。

生まれて最初に額かたいに焼きごてを押しつけられたときはびびったけど、それからは平和でぶるじよ

わーに暮らせてる。

元いた世界では行ったことすらなかった別荘旅行なんてものに行けるのだ。

かなりいい感じに異世界生活できてるのは間違いなかった。

「お前、何考えてんだ？」

リンクスくんが呆れた表情で私を見る。

しかし、私はふっふっふと笑って、用意していたリュックを担かかぎ、リンクスくんを見つめ返した。

まあ糸目いとめだから、目は合わないだけだね。気分です。

「な、なんだよ……」

「なるほど、貴族の旅行がどういうものかはおくわかったよ。侍女の人は確かに君たちの荷物を用意してくれるかもしれない。でも、君たち、旅行というものをナメてないかい？ いつもと違う土地、知らない場所、そこでは何が起こるかわからない！ 旅行には備えというものが必要なんだよ。もしも何かあったとき、頼れるのは自分と自分の荷物だけ！」

私はリュックを担かぎながら、子供たちへと宣言する。

年長者として、人生の先輩として、旅行の心得を見せつけるのだ。

「だから！ 私は!! この荷物を持っていく!!」

「あ、エトワさま、それ着替えですよ。勝手に取らないでください。準備ができません」

リュックからはみ出したドレスをめざとく見つけた侍女の人が困った顔で、私からリュックを取り上げた。

そしてリュックを開けて中身を取り出していく。

「あ、洗面所の石けんまで。どこに行ったのかと思ってたら……って薬!? こんなものどこから持ってきたんですか」

あ〜ん。

「アホか。庭に遊びに行こうぜ」

私の旅行セットは侍女さんたちに解体され、呆れたリンクスくんたちは庭に遊びに行ってしまう。

* * *

今、私の目の前にはエメラルド色の森がどこまでも広がっている。ちょうど発生していた夕霧が森の間を通り抜け、ファンタジー映画の中に来てしまったような景色だった。

澄んだ風が私の頬を撫なでる。

「うおー」

私は感動して叫んでしまった。

なんと一日も経たずに、私たちは公爵家の所有する別荘地の一つにたどり着いてしまったのだ。

移動手段は空飛ぶお船、飛空船ひくうせんだ。

公爵家で五年間暮らしていたけど、そんなもの持ってるなんて知らなかったよ。

それを見たときも感動して叫んでしまって、リンクスくんたちに白い目で見られた。

この別荘地は高原にあるらしい。

人の家はまったくといっていいほどなく、森と草原がどこまでも広がっている。

特に高台に造られた公爵家の別荘から見下ろす景色は格別だった。

ただ低地より気温は低く、春だからかちよつと寒い。

でも、侍女の人が厚めの上着を着せてくれたから大丈夫だ。

「この地方には古代の遺跡があるんですよ。だから王家と公爵家で所有して、一般人は入れないようになっているんです」